

科目間連携における課題と展望に関する一考察 — 身体表現活動分野における授業実践を 保育実践力につなげる試み —

栗原 武志 (熊本学園大学)

A consideration on issues and prospects
in inter-subject collaboration
— Attempt to connect lesson practice in the field of
physical expression activity to childcare practice —

Takeshi KURIHARA

要約

本研究では、本校養成課程における「げんきっずフェスティバル」における身体表現活動を中心的な題材とし、科目間連携における課題と今後の展望について明らかにすることを試みた。その結果、以下の4点が明らかになった。

1. 科目間連携には、複数の科目並びに教員の体制が必要な学びの集大成、学科イベントとしての科目間連携や、少数の科目並びに教員で連携できる比較的簡易な科目間連携等、様々な科目間連携の形がある。

2. 科目間連携の中における教員の役割として、学生に見通しや課題意識をきちんと持たせてあげることや、環境を整えてあげること。学んできた保育者としての知識、技能をつなげてあげる、引き出してあげること等が大切である。

3. 教員にとって科目間連携授業の効果は、他の授業で学生が身につけている能力、技能についての発見及び確認ができる。科目間連携により、様々な科目に渡って大きな物事を動かすことができるからこそ、各教員は、共通認識の上で、頻繁にコミュニケーションを取り、学生の活動の全体像を把握しておくことが必要になってくる課題が明らかになった。

4. 今後の展望として、科目間連携は「保育士の専門性を高める」という質向上の視点に立ち返らせるきっかけになり、科目間連携によって、チームで教えることは、これまでの教育課程にはない大きな可能性と教育的効果をもたらしてくれることが明らかになった。

1. はじめに

2018（平成30）年4月27日、「児童福祉法施行規則及び厚生労働省関係国家戦略特別区域法施行規則の一部を改正する省令」（平成30年厚生労働省令第64号。以下「改正省令」という。）及び「児童福祉法施行規則第六条の二第一項第三号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法の一部を改正する件」（平成30年厚生労働省告示第216号。以下「改正告示」という。）が公布され、改正省令については2020（平成32）年4月1日より施行され、また、改正告示については、2019（平成31）年4月1日より適用されることとなった。この改正の趣旨は、「保育を取り巻く社会情勢の変化、保育所保育指針の改訂等を踏まえ、指定保育士養成施設の修業教科目（保育士養成課程）及び保育士試験の筆記試験科目の一部につき所要の改正を行った」にあり、指定保育士養成施設の設置者は、児童福祉法施行令（昭和23年政令第74号）第5条3項に基づき、当該施設の所在地の都道府県知事に学則の変更を申請し、その承認を受けなければならないこととなった。

上記の保育士養成課程の改正においては、以下の3点に留意の上改正がなされ、各指定保育士養成課程においては、これに留意して養成を行うこととされた。「① 保育士養成課程を構成する教科目全体の体系化及び構造化を行い、各教科目の位置付け及び教科目間の関連性の明確化（特に基礎的事項の理解及びそれを踏まえた実践力の習得）を図ったこと。② 保育所のみならず、保育士が勤務する児童養護施設、障害児支援に関する施設等の多様な施設を念頭に置き、子ども（18歳未満）及び家庭（保護者等）への支援が実践されるように見直しを行ったこと。③ 子ども及び家庭を取り巻く状況が多様化・複雑化する中において、保育の専門職としての継続的なキャリアアップ並びに他の専門職（医師、看護師、栄養士）等との連携及び協働の必要性を踏まえ、現行の履修総単位数（68単位）を維持しつつ、指定保育士養成施設卒業時（保育士資格取得時）に履修すべき内容が過度にならないように配慮したこと」（厚生労働省、2018）。つまり、教科目間の関連性の明確化、保育士の職務が保育所だけではなく、児童養護施設等にも及ぶこと、専門職としての継続的なキャリアアップと他の専門職等との連携及び協働の必要性、これらが今回の保育士養成課程の改正の主要な点であった。

改正にあたり、特に養成校のレベルにおいては、教科目間の関連性の明確化が強く求められ、科目間連携における授業展開が望まれるようになった。併せて教員1人が教科目を担当するのではなく、チームで教えることも重視され始めてきている。厚生労働省（2018）によると「今回の改正は、科目担当者の視点ではなく、現場に出ていく学生の視点から、科目編成等を行っている。1つの科目を1人の教員が網羅できている、できる、とは考えていない」

そこで、本研究においては、本養成校において科目間連携により行われている保育表現研究の授業及びその延長線上にあり、学生にとっては、養成課程における学びの集大成を披露する場でもある「げんきっずフェスティバル」（以下、フェスティバル）から、今回の改正の趣旨でもある「保育者の専門性を高める」という質向上の視点に立ち、科目間連携における課題と今後の展望について、身体表現活動分野の授業実践をとおして明らかにしていきたいと考える。

2. 科目間連携におけるげんきっずフェスティバルの概要

2-1. 教育課程における保育表現研究の位置づけ

本学幼稚園教諭及び保育士養成課程においては、2年次の前期（本学での学期名称は春学期である）より、音楽、美術（造形）、体育の実技系科目が設定されている。各科目Ⅰ～Ⅳの設定があり、ⅠとⅡに関しては、必修科目であり、養成課程に所属する学生は全員履修を行う。例年70～80名の学生が履修をしている（定員80名の学科で、稀に1年次で免許、資格取得を取りやめ、履修しない学生も存在する）。Ⅲ及びⅣに関しては、選択必修の扱いである。体育を例にとると、体育Ⅲ及びⅣの履修者は5名～15名程度が例年の傾向である。よって、2年次前期体育Ⅰ、2年次後期体育Ⅱ、3年次前期体育Ⅲ、3年次後期体育Ⅳが、学生の標準的な履修モデルになる（図1）。他必修科目の重複との関連により、Ⅲ及びⅣの選択必修に関しては、4年次で履修する学生も存在するが、この対象学生に関しては、免許取得条件や卒業条件の単位数も満たしており、非常に意欲の高い、そして公立園を目指すような能力の高い学生が受講している状況である。

図1 実技系(体育)科目の標準的な履修モデル

形態 学年	必修	選択必修
2年次生	体育Ⅰ（前期） 体育Ⅱ（後期）	
3年次生		体育Ⅲ（前期） 体育Ⅳ（後期）

このような教育課程の中で、体育では、Ⅰ～Ⅳをとおして領域「健康」で取り扱うべき項目である運動遊びや表現遊びの内容を取り入れ授業を展開している。特に領域「健康」のねらいである。

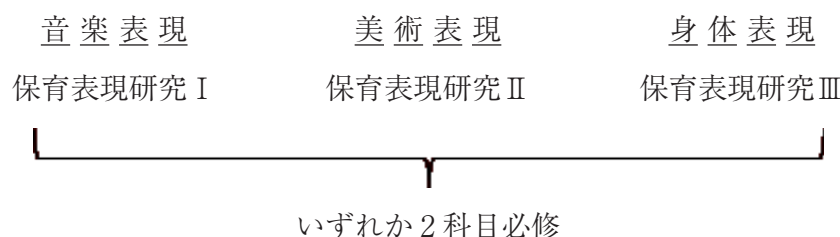
- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。

文部科学省（2017）

については、教科目「体育」Ⅰ～Ⅳの中において、保育現場で必要とされる保育実践力を、具体的活動を通して学ぶことができるように設定している。特に体育Ⅱにおいては、表現遊びの内容を重点的に扱い、体育における身体表現分野の保育実践力の充実に努めているところである。

一方、授業科目「保育表現研究」に関しては、Ⅰ～Ⅲが設定され、音楽、美術（造形）、体育にⅠ～Ⅲが対応している。開設学年、学期は、3年次の前期＋集中であり、保育表現研究Ⅰが音楽表現、保育表現研究Ⅱが美術（造形）表現、保育表現研究Ⅲが身体表現（体育）に該当する。いわば、音楽、美術（造形）、体育の各科目Ⅰ～Ⅳの発展的科目と捉えることができる。また、各科目の大学における授業科目の総まとめとしても捉えられる（図2）。本科目は、幼稚園免許取得希望者選択必修の科目であり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの中から、2科目必修である。例年、幼稚園教諭免許、保育士資格の組み合わせで履修を進める学生が70名前後存在し、ほとんどの学生が本科目を履修している状況にある。近年は、保育士・社会福祉士受験資格を目指す学生も、1,2年生時に役員¹⁾としてげんきっずフェスティバルに携わった経験があるということで、自由科目（必要単位に関係なく）として履修している学生も増えている。

図2 保育表現研究対応分野



また、科目の開設学期を前期＋集中とし、フェスティバルが終わった後、成績評価を行うようにしている。フェスティバルが11月開催の為、前期期間の準備に止まらず、後期期間に準備並びに発表が行われる関係上、準備から発表までの一連の活動を通して評価を行うためである。当初、5年程は、前期期間だけの開設時期に止まっていたが、諸々の課題が生じ、フェスティバルに向けた活動の変遷の中で、科目間の担当者の連携において、より学生が取り組みやすい環境を整える為、改善してきたところである。

2-2. げんきっずフェスティバルの成り立ちと歴史

「保育表現研究」の時間を活用し、げんきっずフェスティバルに向けた準備を進めていくわけであるが、本フェスティバルは以下のような成り立ちから始まる。

保育者を養成する子ども家庭福祉学科（以下、本学科と呼ぶ）は、1961（昭和36）年4月に設置された熊本短期大学保育学科の流れをくみ、2006（平成18）年4月に熊本学園大学社会福祉学部第一部子ども家庭福祉学科として学科開設を果たす。

本フェスティバルの開始にあたって発端となったのが、2009（平成21）年3月に廃止となった熊本県立保育大学校²⁾の学園祭にある。本イベントを本学科のⅠ期生が見学し、本学科内でげんきっずフェスティバルとして立ち上げたのが、イベントの始まりである。

2-3. げんきっずフェスティバルの企画と運営

この11年間、げんきっずフェスティバルの企画・運営ノウハウは、上級学年から次の学年へと引き継がれ、3年次生が中心となり動かしている。3年次生を取り巻く状況としては、保育所以外の施設実習が9月もしくは年を超えて2月に設定されており、おおよそ半分ずつに分かれて実習に出向く。2年次生の9月の初めての保育実習、そして年を明けて2月の初めての幼稚園実習が組まれている状況や、4年次生の就職活動の時期等と比べると、3年生のこの時期は比較的ゆとりがあり、運営を担当する学年としては適切であると考えられる。よって、3年生を主体とし、2年生、1年生の一部の学生でフェスティバルが企画され運営されているのである。

各学年の主な役割分担としては、3年生は保育表現研究Ⅰ及びⅢを受講している学生は、必然的にステージ発表等においてフェスティバルに参加となる。併せて、フェスティバル全体を企画・運営、統括していく立場としての参加も必要になってくる。この形をげんきっずフェスティバル役員（以下、役員）と通常呼んでいるが、役員で参加する学生は、ステージ発表とは別に、全体を運営していく役割を担うことになる。人数としては、おおよそ20名前後であり、フェスティバルに興味を持ち自主的に役員になる学生で構成される³⁾。この構成された3年生の役員により、フェスティバル全体の企画、予算管理、学内外関係各所への交渉・連絡、広報関係等の分担がなされ、フェスティバルが企画・運営されていく。

各実技系科目並びに各保育表現研究を主科目とした科目間連携により展開されるフェスティバルであるが、その企画・運営ノウハウは、前述のとおり上級生から下級生に学生間で引き継がれてきた。その引き継ぎは、主としてフェスティバル運営に関するノウハウや注意事項、実施後の自身の反省や来場者アンケートに加えて、次年度の改善点を記したげんきっずフェスティバル引き継ぎノートにより管理されている。また、2年生、1年生とも一部の学生が自主的に参加⁴⁾し、それぞれ100人程度収容の教室を1つ使用し、手作りボーリングや手作り巨大迷路などのブースを設置している。これらを経験してきた2年生、1年生が、3年生になった時に、役員になっている事例が多く見られ、こうしてフェスティバルは引き継がれていくのである。

2-4. げんきっずフェスティバルに向けた学生及び教員の動向

げんきっずフェスティバルでは、主として、ステージ発表とその他ブースで構成される。ブースは、子どもたちが楽しめるゲームや遊び場で構成されている（図3 図4）。ステージ発表については、ミュージカルやペープサート、人形劇等である（図5 図6）。そして、これらの制作準備で前期の週1回の表現研究の授業は進められていく。以下に、保育表現研究Ⅲ（身体表現活動）の授業計画を示す（図7）。

図3 2015（平成27）年ブースゲームより



図4 2017（平成29）年ブースゲームより



図5 2015（平成27）年 演劇「プレーメンの音楽隊」より



図6 2017（平成29）年 演劇「桃太郎」より



図7 保育表現研究Ⅲ 授業計画（案）

科目名	保育表現研究Ⅲ		
担当教員	栗原 武志（クリハラ タケシ）	単位数	2単位
開講期間	春学期＋集中	授業形態	講義
使用言語	日本語	開講学年（以上）	3年
開講学科	子ども		
資格科目			
授業概要	身体表現領域を中心として、保育士における表現活動及び表現活動の援助方法について実践的に研究する。保育士としての自己表現力を高め、それぞれの子どもとの異なる感性を捉え表現意欲や心情を育てる視点と実際について学ぶ。この科目では、講義と平行しながら実技を行うため、より積極的な学習態度が必要とされる。また実技やグループ活動を行うため出席を重く見る。グループ活動においては、秋に開催される「げんきっずフェスティバル」の準備を兼ねた活動を行なう。		
到達目標	子どもたちの幼少期における豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えの礎を築く保育者としての社会的責任及び倫理観を身につけることができるようになる。 子どもの表現遊び、表現活動の指導者として専門知識及び技能を習得できる。 子どもの実態や課題を的確にとらえ、課題を解決するための表現活動計画を立てることができるようになる。 表現活動・表現遊びが苦手な子ども、嫌いな子どもの気持ちに寄り添うことができるようになる。 子どもの運動遊び、表現遊び、表現活動の指導者として、保育・教育現場で必要とされる保育実践力が身につく。		

カリキュラム学科 2018年度 春学期 学部 社会福祉学部 子福

社会福祉学部DP		関与度
1	多文化・異文化に関する知識の理解、人類の文化、社会と自然に関する知識の理解、社…	◎
2	数量的スキル、情報リテラシー、専門知識・技能、課題探求力	
3	論理的・批判的思考力、総合的判断力、課題解決力	
4	コミュニケーション能力、他者理解、自主・自律性、協調性、リーダーシップ・チーム…	○
5	総合的学習力、創造的思考力	

授業内容		
第1回	保育における体育表現の意義と学習方法	
第2回	子どもの発達と体育表現	
第3回	げんきっずフェスティバルのためのグループ作り	
第4回	舞台演目作成のための方法について（１）	
第5回	舞台演目作成のための方法について（２）	
第6回	舞台演目作成のための実践（１）	
第7回	舞台演目作成のための実践（２）	
第8回	グループ活動(集中)①	
第9回	グループ活動(集中)②	
第10回	グループ活動(集中)③	
第11回	グループ活動(集中)④	
第12回	中間発表会に向けた準備①	
第13回	中間発表会に向けた準備②	
第14回	中間発表会	
第15回	春学期 活動の振り返り及び作品鑑賞	
第16回	げんきっずフェスティバルに向けた準備（１）	
第17回	げんきっずフェスティバルに向けた準備（２）	
第18回	げんきっずフェスティバルに向けた準備（３）	
第19回	げんきっずフェスティバルに向けた準備（４）	
第20回	園児を招いたげんきっずフェスティバルでの発表（１）	
第21回	園児を招いたげんきっずフェスティバルでの発表（２）	
第22回	園児を招いたげんきっずフェスティバルでの発表（３）	
第23回	園児を招いたげんきっずフェスティバルでの発表（４）	
第24回	園児を招いたげんきっずフェスティバルでの発表（５）	
第25回	園児を招いたげんきっずフェスティバルでの発表（６）	
第26回	園児を招いたげんきっずフェスティバルでの発表（７）	
第27回	園児を招いたげんきっずフェスティバルでの発表（８）	
第28回	げんきっずフェスティバルでの活動反省（１）	
第29回	げんきっずフェスティバルでの活動反省（２）	
第30回	授業のまとめ	
事前事後学修(具体的な内容及び必要な時間)	4～5月の講義内において、げんきっずフェスティバル実施のための土台となるチームビルディングを行う。グループ活動中は、舞台演目別の活動となり、げんきっずフェスティバル終了後までの期間を通した学生相互の協力が必要であり、授業時間の2倍近くの個人練習やグループ練習、事前準備を要する。	
試験や課題に対するフィードバック方法	履修者の学修意欲向上及び保育技能向上の為に、演劇活動等をビデオ撮影し、自分の動きや全体の動きの確認を繰り返し保育技能の習熟度を図る。また、授業時のリフレクションシートを次時の授業内で紹介する。	
受講上の注意点	施設・設備等の事情で、履修者数を制限することがある。	
教科書	適宜資料を配布する	
参考文献	適宜紹介する	
成績評価方法		評価割合
A.定期試験		0%
B.レポート		20%
C.中間試験		0%
D.小テスト		0%
E.発表(プレゼンテーション等)		40%
F.平常点・授業への貢献度		40%
G.その他		0%
成績評価についての補足	演劇制作時のグループワークへの関わりを重視する。	
添付ファイル		

図7 保育表現研究Ⅲ授業計画（案）に示したように、保育表現研究の授業は前期15回で進んでいく（16回目以降は、フェスティバルに向けた準備や当日の予定である）。始めの4～5回は、教師主導の下、幼児期における身体表現活動の意義や実際の園での活動の様子等について学んでいく。並行して、過去のフェスティバルの作品等を観劇したり、また、劇団四季等プロの身体表現活動等も学んだりしながら、徐々に自分たちの制作活動の構想を練り上げる。授業も中盤を過ぎると、ミュージカルや人形劇、ペープサート等に分かれて、グループリーダーを中心に進め、キャストやナレーター、道具係等の役割分担を行いグループ活動を行っていく。その際、教師は全体のペース配分や、グループで解決できない問題が発生した時の調整役になる。また、前期においては、保育表現研究の授業外の放課後、空き時間を使い、3年生の役員が、フェスティバル当日の一般の方の集客に向けて広報活動等を展開していく。この際、教師は、学生では難しい学内外の調整を行う。

前期が終わり後期になると、授業時間として設定されていないゆえ、学生が自主的に準備を進めていくことになる。授業の空き時間に集まっては、制作をしたり、演劇の練習をしたりする。10月の中旬以降、フェスティバルが近づいてくると、リハーサルを行い、準備の最終局面を迎える。この時教員は、安全面を主眼とし、最終の調整と確認を実施する。こうして、学生主体でフェスティバルに向けて高い意欲を保ったまま11月初旬のげんきっずフェスティバルを迎えるわけである。

以下に、フェスティバル期間中のプログラムを記す。（図8）

図8 2018(平成30)年 げんきっずフェスティバルプログラム

げんきっずフェスティバル 11回

日時: 11月2日(金) 10:00~15:20
11月3日(土) 10:10~15:30
※ 文化の日

場所: 熊本学園大学14号館 (授乳室あり)

△ 注意 △

- ・館内は飲食禁止となっております。
- ・遺失物・迷子は受付で対応いたします。
- ・ステージプログラムは変更になる場合がございます。
- ・何かご不明な点がございましたら、こちらまでお問い合わせ下さい。

TEL: 080-8390-6295
学生代表 平木凱人

① チェクイン 受付開始 10:00~

② ブースゲームもあるよ!

ステージプログラム

1日目	2日目
10:00 オープニング	10:10 ミュージカル
10:20 ミュージカル	10:50 人形劇
11:00 ペープサート	11:15 親子体操
11:25 人形劇	11:40 ミュージカル
11:55 人形劇	12:10 屋外体操
12:10 屋外体操	13:20 ペープサート
13:20 ミュージカル	13:45 マジック
14:00 ペープサート	14:15 ペープサート
14:25 親子体操	14:40 ミュージカル
14:50 ミュージカル	15:20 エンディング
15:20 終了	15:30 終了

3. 科目間連携における身体表現活動の課題と展望

3-1. 科目間連携における教師の役割

前節、概要の中でフェスティバルに向けた教員の動向を少し触れたが、本節においてはより詳細に、科目間連携の中での教員の役割について明らかにしていきたいと考える。

フェスティバルにおける身体表現活動として、保育表現研究Ⅲにおいて、例年ミュージカルに取り組んでいる。ここ6年間の受講者数の推移を分析すると、おおよそ50名程度である（表1）。フェスティバルに向け、グループ活動により発表の準備を進めるにあたり、1グループ、つまり1演目約20名前後のグループにて制作を進めた方が、準備を進めやすい。1グループの人数が多いと、グループ内の意思疎通に時間がかかったり、意欲の有無による準備作業の偏り、またそこを起点とするグループ内のトラブルが発生したりするので、保育表現研究Ⅲにおいては、例年2グループに分かれて、ミュージカルの演目を2題制作するようにしている。

表1 保育表現研究Ⅲ 受講者数の推移

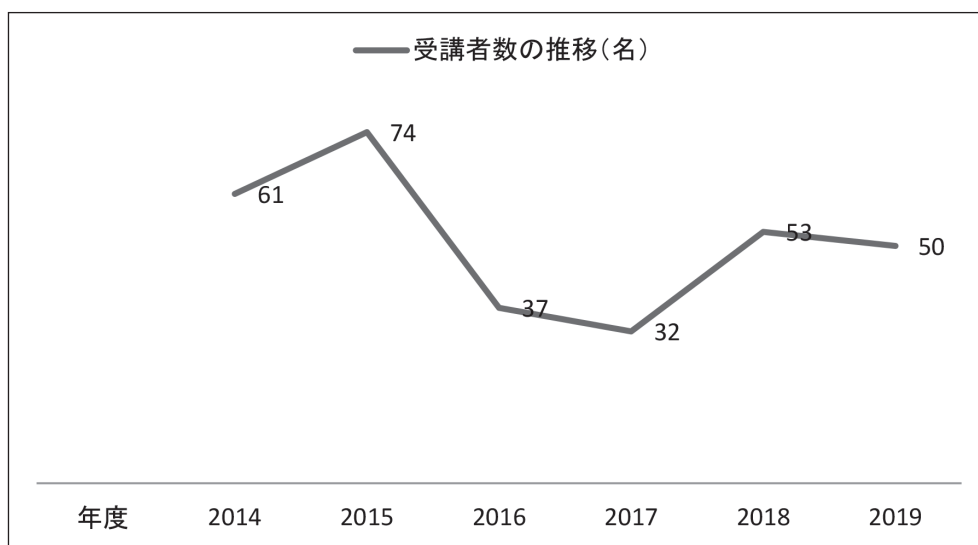


図7 保育表現研究授業計画（案）において示した通り、まず授業1回目は、授業の進め方等オリエンテーションからスタートする。その後、2回目、3回目は、実際園で実施されている学習発表会や生活発表会の様子を視聴する。3, 4, 5歳児それぞれの演劇を観劇し、「子どもたちの普段の遊びの中でやっていることを取り入れて発表していく事や、劇づくり、発表のための劇づくりにならないように」と、養成課程の授業実践の延長線上における保育実践にて、身体表現活動の現場で求められる実際を伝えて行く。4回目、5回目は、先輩たちの過去の作品を見て、保育技術を学んだり、全体テーマから考えたところで、この授業で取り組む演劇（演劇形態、題目、テーマ）等を学生の議論により決めていく。フェスティバルに何度も足を運んでくれるリピーターの子どもたちも沢山いるので、なるべくここ2～3年以内の作品ではないものを演題するように展開している。これらが決まってくると、脚本

等が動き始める。脚本が出来上がる迄に数週間要するので、その間、授業では、過去の作品や劇団四季の作品を鑑賞し、プロの演技や練習法（発声や環境設定）に学ぶ時間等を設定している。また、この間レポート課題を提示し、ミュージカルを2作品観劇してミュージカルに対する造詣を深めるような展開にしている。

脚本が出来上がれば、それをたたき台に進めることができるので、このあたりからグループ活動に入り、学生主体の活動に移っていく。よって、グループ活動に入ったら、互いのグループが準備や練習を進めやすい環境の準備や設定が、教師としての役割になる。その後、12回目、13回目と通し練習（通し稽古）をし、14回目8割程度の完成で中間テストという展開になる。ここで、他のグループと見比べたり、ビデオで撮影したりして、現状の出来映えを確認する。8割ぐらいの完成度を目指していたとはいえ、この状態では十分ではないという自己省察を行い、危機感を抱くようである。「これでは、来てもらう子どもたちに失礼にあたるし、見せることができない（受講者の声）。」春学期の授業が終われば、それ以降の期間は、学生自身で調整し集まることになるので、この中間テストを契機に危機感をもった活動が始まり、10月末頃に教員に観てもらい助言を求める、という展開になる。そこで、教員が観劇をし、全体の調整をし、本番に臨むというような一連の流れが毎年繰り返されている。

よって、フェスティバルを展開する、このような科目間連携の中において、教員の役割として、一つ目は、見通しを持たせてあげる。何を目的とした授業なのか、フェスティバルなのか、課題意識をきちんと持たせてあげることで、保育実践力につながっていくのではないかと考える。二つ目は、環境を整えてあげる。練習時間、場所の確保。本学科では、月曜日の午後を保育表現研究の授業でまとめ、時間確保に努めている。三つ目は、保育者としての知識、技能は、一科目担当者より学生の方が広く有しているので、その知識、技能をつなげてあげる、引き出してあげる役割が教員の役割であると考え。これら3つの役割が、科目間連携の中で授業を展開するにあたり存在するのではないかと考える。

3-2. 科目間連携の中での学生の取組とふり振り返り

科目間連携をとおして実施されるげんきっずフェスティバルをとおして、学生は何を学び、何を課題としているのだろうか。

栗原（2018）によると、「演劇発表の成否に関しては、約9割の学生がうまくいった（成功した）と回顧し、履修者自身のステージ上の発表に関しては、ほぼ100%の履修者が、普段の自分以上に力を発揮できていることが明らかになった。」「約9割の学生が、身体表現活動の取り組みについて満足しており、今までの自分の表現活動の限界（殻）を打ち破り、新しい自分への成長を感じられたとしている。加えて、履修者全員が、今後の保育活動に、この身体表現活動で得た経験を生かすことができると考えていることが明らかになった」と述べ、げんきっずフェスティバルでの学生の学びや取り組みが十分であることを示している。また、課題についても、「子どもたちの前で、演劇発表に至るまでの練習については、やや練習不足と思っている学生が4割と高い値を示しており」とし、今後フェスティバルを継続していく上で、発表に至るまでの練習の在り方について一考を促している。

また、2016年に行った学生へのインタビュー調査においては、「音楽とか途中歌う所もあるので、子どもたちが一緒に盛り上がり、笑ってくれて、楽しんでもくれる、そのようなミュージカル制作に取り組みました。しかし、制作の過程において、人がなかなか集まらない、みんなのやる気スイッチを押すにはどうすれば良いのか、という点が苦悩であり課題であった。一方、完成が見えてくるにつれ、グループのみんながああした方が良い、こうした方が良いと様々な意見を言ってくれたので楽しく取り組むことができた」（ミュージカルリーダーⅠ）とミュージカル制作にあたっての苦悩と喜びを答え、フェスティバルに取り組む学生の様子が残されている。後述するが、科目間連携における科目担当教師として、学生のスムーズな取り組みのためにも、学生の共有意識をきちんと持たせ、その意識を維持してあげることが大切であると言えるだろう。

また、栗原（2018）においては、げんきっずフェスティバルに要求された科目別要素を問いかけており、「身体表現分野では、表現活動全体の割合からいくと、他の科目よりも全体で占める割合は2割程度かそれ以下だと感じている履修者が7割弱で、他の科目要素が高いことが明らかになった」と、科目要素別の観点からフェスティバルへの学生の取り組みを明らかにしている。これらは、科目間連携において行われ、学びの集大成であるげんきっずフェスティバルだからこそ明らかになる現象であるといえるだろう。げんきっずフェスティバルを行う際に、身体表現分野の要素に取り組むことに関しては、まだまだ検討の余地があるようだ。科目担当教員から学生への意識づけやその伝え方を工夫することもフェスティバルにおいて、科目要素を引き上げる為の今後の一考であると考ええる。

科目間連携において行うイベントは、教員にとって、他の授業で学生が身につけている能力、技能についての発見があり、教員間のコミュニケーションが良好であれば、互いに確認しカリキュラムの改善を行い、相乗効果で、さらに主体的で深い学びにつなげていくような授業内容、プログラムの提案を学生に提案でき、養成校の教員としてもさらなる学びと研鑽に励むことができると考える。一方、学生にとってもより現場実践で求められる活動を教育課程の中で経験できる。各科目で学んだことをその科目で完結し終わらせるのではなく、より実践に近い形で応用し、科目で学んだことが次のステージにつながっていく、ひいては保育実践力として身につけていくことを実感できるのではないかと、科目間連携における学生の振り返りから考察する。

3-3. 科目間連携の中での科目担当者の課題と改善

科目間連携の中でげんきっずフェスティバルを行っていく上で、科目間連携であるがゆえの教員側が感じる課題や、その可能性について、この節では考察を深める。

げんきっずフェスティバルに向けて作業準備を進めていく中で、最大の課題は準備にかけることができる時間が十分ではないという時間不足の問題である。第2章1項にて前述したとおり、音楽・美術・体育、音楽表現、美術表現、身体表現の3科目で、保育表現研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと3年生春学期に各15コマ授業が設定されている。3科目合計45コマ。教員が各科目、前半一斉授業の形で5コマ講義をしても、各科目10コマ程度の合計30コマは、ステージ発表等の演劇準備に学生がグループワークとしての活動に充てることができるはずである

が、運営の実際としては、保育表現研究Ⅰ（音楽表現）、保育表現研究Ⅲ（身体表現）の2科目で20コマ程度しか、学生が作業準備に充てることができない状況が発生している。

このような結果、授業時間以外での学生の大幅な作業や、持ち帰り作業が発生し、無制限な学生の取組に繋がっていると考えられる。無制限な学生の取組を防ぐためにも、科目間連携における各教員の学生の活動内容の把握と、学生の活動に対する時間制限や活動期間の制限の周知徹底が必要であると考え。実際、次のような問題が例年起きている。「授業時間中に学生の準備のための時間、特にミュージカルに使用する制作物（大道具、背景）等が準備できないため、授業期間以外の夏休みや9月、10月の作業が発生している。」また、「ステージ発表以外の教室等でのゲーム制作や迷路制作に時間が確保できず、役員の立場の学生たちが行う作業ではあるが、結果こちらも学生負担が発生している。」さらには、「学生主体の運営になっているが、運営に関する作業（例、学年を超えた打ち合わせ会議、園への案内チラシ制作や配布、ステージ発表やそれ以外の企画等）も、学生負担が生じている。」真面目で素直な学生が多いので、フェスティバルが自らの保育技術につながると考えて、楽しんで取り組んでくれるという学生の善意に頼る場面が生じているのも現実であり、大きな課題である。

よって、科目間連携における2つ目の課題として、教員間の授業科目や学内行事に対する共通認識や情報共有の必要性の欠如、また、そこに附随してくる教員間のコミュニケーション不足をあげることができるのではないかと考える。

学生にとってフェスティバルの位置づけは、これまでも述べてきたが、保育者になるために学んできたことの総まとめとしての発表と、保育を志す同志と保育表現技術を共有し保育実践力を高める場にある。よって、教員もフェスティバルの位置づけの確認を行い、学生の保育実践力を披露する場であり、行事、イベント等を企画し、安全に遂行できる能力を養う場であると共通認識しておく必要がある。また、ある一面では、学科の学びを地域に広報し、地域の方々に来場いただけることで、学生の学びを地域に還元する大学の社会的使命と考えられる意識が必要であると考え。そこには、科目間連携に携わる教員だけではなく、本学科教員全体の連携も必要であるだろう。いわば、学科教員の役割分担の必要性（授業に関わる教員だけではなく、運営面をサポートできる教員の存在）である。科目間連携により、様々な科目に渡って大きな物事を動かすことができるからこそ、各教員は、共通認識の上で、頻繁にコミュニケーションを取り、学生の活動の全体像を把握しておくことが必要になってくる。授業では、学生の意思に関わらず授業に拘束されるので、出席して作業を進めるが、授業を外れると、出席がままならず、一部の学生に負担が行き、それが学生間でトラブルの原因になる場面も多々ある。学生間の温度差が生じ、役員等真面目でしっかりしている学生に負担がいくので、教員側はそのあたりを注視しておく必要があり、このような視点からも科目間連携の教員並びに学科教員全体の情報共有及び積極的なコミュニケーションが大切になってくるのである。改善策の一案ではあるが、人事等採用の際に、学科の将来的発展に向けた運営に積極的にご協力いただける人材を募集し、学科内を組織立てていく必要があるのではないかと考える。保育所保育指針（最新版）の流れによるところの、科目を一人で教えるのではなく、複数の教員によって教授される、つまりチームで教えるという視点で

ある。

保育表現研究という科目並びにげんきっずフェスティバルは、学生にとって現場で必要とされる必須の行事である学生成果発表会や生活発表会を経験できる場であり、うまく目的に向って人間関係が回り始めると通常の15コマでは感じ得ない感動と達成感、そして保育者としての技術を仲間と共有できる時間である。科目担当者としては、各教員の授業では見られなかった能力、技術、意欲を感じられる場面であり、学生を保育者として地域に還していくために、さらに応援していきたくする醍醐味を味わえる時間でもある。また、学生を保育者として成長させるための他教員の意欲や熱意を感じ、自分の科目の側面からも、より実践力や保育者としての心構え、職能成長につながる視点を伝え続けていかなければならないという気持ちを新たにさせてくれる場面でもある。つまるところ「保育士の専門性を高める」という質向上の視点に立ち返らせるきっかけになると考える。科目間連携によって、チームで教えることは、これまでの教育課程にはない大きな可能性と教育的効果をもたらしてくれるものと考ええる。

4. 科目間連携における諸々の事例と課題

4-1. 養成校における科目間連携の事例及び体制

科目間連携を行っている事例として卒業研究発表会や本学科のように表現研究発表会を行っている養成校は多い。例えば、東京女子体育短期大学児童教育学科（2018）の「創作オペレッタ」や鹿児島女子短期大学児童教育学科の児教子どもフェスティバルでの舞台劇、オペレッタ⁵⁾、岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科初等教育学専攻子ども発達専修のミュージカル⁶⁾等が挙げられる。これらは、異なる専門の教科目を複数連携させ、1つのフェスティバルないし学びの集大成として発表される、いわば大がかりな科目間連携であると言えよう。

一方、少数の教員でできる比較的容易な科目間連携としては、鳥居ら（2019）の食育カルタ制作が見られたり、神垣ら（2010）の領域「言葉」と領域「表現Ⅱ（造形分野）」の連携といった事例における紙芝居制作・発表会が見られる。同様に保育内容領域「言葉」と保育表現技術Ⅲで広渡・讃岐の事例が挙げられる。広渡・讃岐（2012）は、1年次「保育内容言葉」で導入をした絵本の読み聞かせ、ストーリーテリング、わらべうた、ことば遊びの実践（実技）について、2年次「保育表現技術Ⅲ」で実習準備を兼ねてさらに実践を重ね、その意義と実践上の留意点などを確認し、科目間連携することで授業内容を深めている。

その他にも、同一科目担当者による隣接科目において連携する場合も見られるだろう。例えば、保育内容領域「健康」と幼児体育といった科目で展開される模擬運動会⁷⁾といった事例をあげることができる。

よって、科目間連携と一括りにいっても、そこには、複数の科目並びに教員の体制が必要な学びの集大成、学科イベントとしての科目間連携や、少数の科目並びに教員で連携できる比較的簡易な科目間連携、同一教員の担当する授業科目の中で、一教員で完結できる科目間連携のものまで、様々な科目間連携の形があるといえる。

4-2. 養成校における科目間連携の課題

前節で述べたように、科目間連携における取組として、オペレッタやミュージカル、紙芝居制作・発表会に止まらず、食育カルタ制作であったり模擬運動会の実施であったりと科目間連携の事例や、またそれらの事例を実施する体制にも種々の違いや体制があり行われていることが明らかになった。本節においては、これらの事例を基に科目間連携の際に生じる課題や問題について取り上げていきたい。

保育学会九州ブロック（2019）によると、分科会において科目間連携の際に生じる課題や問題を取り上げ議論を行っている。

「時間制限が限られた短大でどのように科目連携を行うのか。卒業研究発表会、表現研究発表会を行っている学校は多い。しかしながら、時間制限の問題や表現研究担当の科目担当者以外がどのように関わるのか、また、表現研究担当者以外の教員の関わりが分からないので、発表会の名称を検討して、学科教員全体で関われる体制を築いたらどうだろうか。模擬運動会を実施している大学もある」

「現場での実践力を培うための発表の場を準備している大学は多い。しかしながら、教員間の連携、特に芸術系教員の参加がどうしても課題になってくる。どういう保育者を育てたいのかというFD研修を泊まり込みで行い、学科教員間の情報共有を行っている大学もある。4大は人数が多いので、きめ細やかさがかけてくる現状がある。様々な行事、学生が主体的に学んでいるのか、また、そのプロセスで学生の学びが深まっているのかが大切ではないか」

「実習指導で複数の教員が連携している事例や総合表現において3名で連携している事例が挙げられた。しかしながら、スタッフ間の時間のすり合わせが難しく、時間自体の捻出が難しい状況がある。これらが課題で、そこをどう変えていくか。また、時間がない中で気になる学生等の情報交換をしていくことが必要。教員の代替わりがあり、退職等切り替えの際に連携して取り組んでいただけるか、きちんと伝えておく。非常勤講師の先生方との情報共有の会議を取り持つ事も必要ではないか」

「課題と展望においては、課題として、フェスティバルに向けた時間不足や教員間のコミュニケーション不足が挙げられ、教員側のマネジメント能力の大切さや学科教員の役割分担の必要性が説かれた。また、展望としては、学生にとっては保育実践力の向上に繋がり、教員にとっては、他の授業で学生が身につけている能力、技能についての発見があり、互いに授業内容の改善や学生が主体的に深い学びにつながる授業内容、プログラムの提案ができるのではないかと」

保育学会九州ブロック（2019）

これら養成校現場の実態から課題を探ると、科目間連携の課題の1つとして、4年制大学と2年制の短期大学での取り組み方の違いをあげることができるだろう。ここには、4年間と2年間という時間の違いによる科目間連携のあり方を問うている。次に、学科イベントを行う為に、科目間連携を用いた場合、特定の科目以外の教員の関わり方について、問う課題も浮き彫りになる。また、これらの前提として教員間の時間等々の調整が難しいという現状もあげられている。それは、専任教員しかり非常勤講師しかりである。

5. まとめ

本研究では、本校養成課程における学びの集大成を披露する場である「げんきっずフェスティバル」における身体表現活動を中心的な題材とし、科目間連携における課題と今後の展望について明らかにしてきた。

その成果として、以下のことを明らかにすることができた。

1. 科目間連携と一括りにいっても、そこには、複数の科目並びに教員の体制が必要な、学びの集大成、学科イベントとしての科目間連携や、少数の科目並びに教員で連携できる比較的簡易な科目間連携、同一教員の担当する授業科目の中で、一教員で完結できる科目間連携のものまで、様々な科目間連携の形があることを明らかにすることができた。
2. フェスティバル展開を目的とした科目間連携の中における教員の役割として、1点目、見通しを持たせてあげる。何のための授業なのか、フェスティバルなのか、課題意識をきちんと持たせてあげる。2点目、環境を整えてあげる。練習時間、場所の確保。3点目、保育者としての知識、技能は、一科目担当者より学生の方が広く有しているので、その知識、技能をつなげてあげる、引き出してあげる。これら3つの役割が、科目間連携を基に授業を展開する上で大切な教員の役割であることを明らかにできた。
3. 教員にとって科目間連携授業の効果は、他の授業で学生が身につけている能力、技能についての発見及び確認ができる。教員間のコミュニケーションが良好であれば、互いに確認しカリキュラムの改善を行い、相乗効果で、さらに主体的で深い学びにつなげていくような授業内容、プログラムの提案を学生に提案でき、養成校の教員としてもさらなる学びと研鑽に励むことができる。一方、科目間連携により、様々な科目に渡って大きな物事を動かすことができるからこそ、各教員は、共通認識の上で、頻繁にコミュニケーションを取り、学生の活動の全体像を把握しておくことが必要になってくる課題も見えてきた。
4. 今後の展望として、科目間連携は「保育士の専門性を高める」という質向上の視点に立ち返らせるきっかけになるかと考えるし、科目間連携によって、チームで教えることは、これまでの教育課程にはない大きな可能性と教育的効果をもたらしてくれることを明らかにできた。

注

- 1) げんきっずフェスティバル役員は、1、2年時においては主としてブースゲームの製作、運営を担う。また、フェスティバル当日はイベントの裏方の役目を担う。
- 2) 熊本県熊本市にある保育士養成の専修学校。2009年3月閉校。
- 3) 2019（平成31）年においては、科目履修等に関係なく、3年生全員（約80名）で役員（実行委員）を構成し、役割を分担する試みが行われた。
- 4) 1、2年生のフェスティバル役員が主たる参加者である。
- 5) 鹿児島女子短期大学児童教育学科のHPに掲載。
- 6) 岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科初等教育学専攻のHPに掲載。
- 7) 森谷ら（2006）が保育者養成実践教育に小特集を組み、学生の保育者力養成における教材「模擬運動会」の可能性を追求している。

文献

- 広渡純子・讃岐京子（2012）保育者養成カリキュラムにおける科目間連携（1）：「保育内容言葉」と「保育表現技術」の連携．聖和論集40号．69-78.
- 保育学会九州ブロック（2019）九州ブロックセミナー第2分科会報告「保育士の専門性を高める科目間連携のあり方について考える」．九州ブロックセミナー報告書．14-15.
- 神垣彬子・伊藤智里・尾崎公彦（2010）領域「言葉」と領域「表現」の連携授業についての一考察．—保育者養成校における科目間の試験的連携—．広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設幼年教育年報32巻．95-100.
- 厚生労働省（2018）平成30年度保育士養成研究所第1回研修会「新保育士養成課程に基づく授業展開～新養成課程での課題の可能性～」．厚生労働省子ども家庭局保育課専門官、平成30年6月24日
- 栗原武志（2018）保育者養成課程における保育表現のあり方に関する一考察．熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科保育者養成実践研究第1巻1号．15-23.
- 三好優美子・渡邊洋・長谷川千里・柳田憲一（2018）総合表現（創作オペレッタ）における表現科目の連携：「音楽」「造形表現」「身体表現」の観点から．東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第53号．47-62.
- 文部科学省（2017）幼稚園教育要領．pp.3
- 森谷直樹・清水桂子（2006）学生の保育者力養成における教材「模擬運動会」の可能性（小特集 保育者養成実践教育）．文化女子大学室蘭短期大学研究紀要29巻．46-71.
- 齋藤正人・木許隆（2018）領域「表現」における科目間連携の一考察：授業内容の改善を目指して．岐阜聖徳学園大学教育学部教育実践科学研究センター紀要．171-177.
- 柴田卓・伊藤哲章・猪股照子・バーナミイポールエドワード・仲西真美子・三瓶令子（2018）保育者養成校における実習を中心とした科目間連携に関する研究．郡山女子大学紀要第54号．117-133.
- 鳥居美佳子・古屋祥子・山田千明（2017）食育カルタ制作：保育内容複数領域の科目間連携授業の試み．山梨県立大学人間福祉学部紀要14巻．68-82.

A consideration on issues and prospects
in inter-subject collaboration
— Attempt to connect lesson practice in the field of
physical expression activity to childcare practice —

Takeshi KURIHARA

Summary

In this study, we focused on physical expression activities at the "Genkids Festival" in our school training course, and tried to clarify the issues and future prospects in inter-subject collaboration.

As a result, 1. There are various forms of inter-subject collaboration. 2. As the role of faculty members in inter-subject collaboration, it is important to give students a proper outlook and awareness of issues, and to prepare the environment. 3. Because it is possible to move big things across various subjects through inter-subject collaboration, it is necessary for each faculty member to communicate frequently and grasp the overall picture of student activities based on a common understanding. I also saw the challenges that were needed. 4. As a future outlook, inter-subject collaboration will be an opportunity to return to the viewpoint of quality improvement of "improving the specialty of nursery teachers", and teaching as a team through inter-subject collaboration is not in the curriculum so far. It brings great potential and educational benefits.

We were able to clarify the above four points.